

# 実践発表

## 「院生（修士2年）の修了研究グループ討議」

2年次生15名の各自の修了研究について、5つのミーティングルームに分かれてグループ討議を行った。それぞれのグループでは、院生の研究発表のあと参加者による活発な質疑応答がなされ、最後に指導・助言者としてお招きした石川県教育委員会の指導主事等及び県下の学校で指導的役割を担っておられる管理職の方々より講評を頂いた。

	院生氏名	修了研究題目
学習 デザイン ・ 現職	① 北 翔平	作業学習における学ぶ意欲を高める授業の展開 — 「やりたい」と「できそう」を紡ぐ授業づくり—
	② 蔵谷 京子	子どもが自分から動き出す授業づくり — 国語科の授業を例として—
	③ 能山 公介	集団への適応につまずきを抱える生徒の学びを深める社会科授業 — 自己評価活動への働きかけを通して—
	④ 林 由佳	思考が広がり深まる授業をめざして — 遠隔合同授業を効果的に活用して—
	⑤ 松田 剛	有用性を実感させる理科の授業設計
学習 デザイン ・ 学卒	① 小澤 大地	高等学校数学科における協働学習を用いた授業デザイン — 生徒の数学に対する態度と学びの生産性を視点として—
	② 川端 葵	生徒の思考が深まる高校古典の授業の在り方
	③ 中村 光佑	事象を数理的に捉えることのできる生徒の育成を目指して — 中学校数学科における「方法知」の視点を取り入れた授業実践—
	④ 西川 果那	音楽科における豊かな感性の育成を目指した鑑賞指導
	⑤ 本郷 行秀	持続可能な社会の担い手の育成を目指して生徒の内発的な課題意識を醸成する中学校の授業 — 生徒に委ねる中で『なんで?』が表出するために—
学校 マネジ メント ・ 現職	① 小山 二郎	対話に基づく「心理的安全性」の構築を目指した学校運営 — 盲学校におけるミドル世代のマネジメント—
	② 納谷 健治	居心地のよい職員室づくり — 居心地プロジェクトの実践を通して—
	③ 日光 博史	対話を通じた校内研修の構築
	④ 廣田 学	若手教員のやりがいを生み出す働きかけ — ミドルリーダーと若手教員の関わり合い—
	⑤ 林 理恵子	園内研修の土壌づくり — 管理職としての取り組み—



# 作業学習における学ぶ意欲を高める授業の展開

## —「やりたい」と「できそう」を紡ぐ授業づくり—

北 翔平

金沢大学大学院教職実践研究科 学習デザインコース

**【概要】**本研究は特別支援学校の作業学習において、学習意欲の向上を図るための指導法や授業展開を提案することを目的とする。本研究では生徒の学習意欲の向上のために、エンゲージメントを促す環境要因をもとにした指導・授業展開を行い、アンケートを活用して学習意欲に関わるデータ収集、分析を行った。さらに、抽出生徒の作業日誌や発話記録から、知識・技能を習得・活用しようとする姿や、思考・判断・表現を働かせる姿を見取った。そして、生徒が課題を自分事として捉え、学習の進め方を試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかを分析した。実践を通して、生徒が自分自身の知識・技能を使って自らの考えを表現したり、学習課題へのチャレンジを通して成長したりすることを十分に許容する教育環境であればあるほど、自己決定的な姿が促されるということが明らかになった。

### グループ討議

〈意見交流〉

- 作業学習において生徒の主体的な学びを追求している。学びの意欲について焦点化し心理学的なエビデンスに基づいて授業づくりを行っていることが質の高い指導であると思う。これまでの作業学習の取組と今回の実践研究を通じた取組の違いは、これまででは、学習の目標を漠然と働く意欲を育てるとして活動に取り組み、その評価を生徒の姿から主観的に見とっていた。今回の取組では、学ぶ意欲を高めることを目的として、その手立てを心理学的な知見をもとに考え授業を改善している。
- 生徒の意欲を高めるために授業の設計段階で工夫したことは、これまで教師が行っていた作業準備の段階の活動を生徒に任せていくこと、生徒に試行錯誤させ、失敗からも学ぶ環境を作ったこと、清掃作業の他に受注作業にも取り組み作業内容の拡大を行った。これらは生徒たちの自己決定・自己選択の機会を増やしたり個々の生徒が自分の得意なことを発揮したりしながら協同することに結びついた。例えば駐車場のライン引きの作業では外側にはみ出してしまう生徒が、自分の苦手を受け入れ、他の生徒に外側を塗ることを頼み、自分が内側を塗るという協同の姿が見られた。また、受注作業について、いつ作業を行えば良いかなど

の作業計画を生徒同士相談して立案するようになった。このような実践は他の教員も取り組んでみようと思えるもので大変参考になった。

〈指導助言〉石川県立いしかわ特別支援学校

近藤貴好 校長

- ・ビルクリーニングは化粧仕事であり、綺麗な結果が当たり前である。
- ・作業学習としても本物志向の活動を目指したい。その中で生徒の達成感を持たせることが大切である。
- ・学校で学んだ知識や技術を外部の清掃活動へと発展させることも生徒の達成感を高める上で重要である。
- ・作業学習だけでなく学校の教育活動全体を通してキャリア発達の視点を持つことも必要である。自分の学びを振り返りながら、将来への見通しを持たせられるようにしたい。
- ・GIGA スクール構想が進む中で ICT 機器を作業学習の活動の中でも活用したい。
- ・学習評価は生徒が目標とする姿を具体的にイメージできるようにルーブリック評価など多様な評価を取り入れると良い。

# 子どもが自分から動き出す授業づくり

## — 国語科の授業を例として —

蔵谷 京子

金沢大学大学院教職実践研究科 学習デザインコース

**【概要】**本研究は、小学校における授業場面での教師の役割を明らかにすることを目的とする。子どもたちは教科の学びとその学びを支える学習方法を獲得することで、自分で課題を見つけ解決しようとしたり学んだことを活かそうとしたりするなど自分から動き出すことができるのではないかと考えた。教科の学びについては連携協力校カリキュラムに則って実施し、学習によって身に付いた力を明文化することで学びの自覚化を図り、子どもが自分から動き出す力となったかを検証した。また、付箋紙や短冊の活用などの学習方法は、教科や単元の特性と子どもの実態に応じて柔軟に用いることとした。実践を重ねた結果、教科の学びにおいて、教科の学びを支える学習方法がくり返し用いられることによって、いつでも使えるツールとなり学習を進める過程で子どもが自分から選択して用いるようになった。

### グループ討議

まず発表者より、自ら動き出す授業づくりについて、①学級づくり、②自ら学びを深める学習方法として付箋や短冊、ワールドカフェなどを取り入れた実践の積み重ねについて報告を行った。そして、このように自ら動き出した子どもたちに対して、③国語科の物語教材での実践を行い、その成果について報告があった。

グループ討議では、口頭及びチャットで質問があり、質問に対する回答が報告者からなされた。

まず、小学校教員として方言を使っていることについて、馳衆議院議員より指摘があり、国語として子どものことばづかいをどのように指導しているのかについての質問があった。報告者からは、授業中の発表場面では方言ではなくしっかりした話し言葉で発表するよう指導しているとの説明があった。

次に、他大学の教職大学院の参加者から、国語の実践を中心に報告がなされたが、他の教科における子どもたちの様子や変化について質問があった。報告者からは、教師からの指示を待つのではなく、自ら課題を解決する姿が他教科でも見られたことが報告され、理科の実践についての紹介があった。

また、チャットによっても質問がなされた。自分の考えを整理したり、他の子どもと意見交流したりする手段として、付箋を導入したという話があったが、45分の国語の時間の中で書く、読む、聞く、

話す時間をどのように配分しているのかという質問があった。それに対し、教師がバランスを考えるのではなく、付箋を書く時間や交流する時間なども子どもたちに任せていたとの回答があった。

最後に石川県教育委員会学校指導課羽土指導主事より、本研究に対して3つの助言をいただいた。第一に、報告者の実践に対して、教師が先回りをせず子どもたち自身に試行錯誤をさせていることの大切さについての指摘があった。第二に、何を学ぶかだけでなく、どのように学ぶのか、何ができるようになるのかを子ども自身が意識できるようになっていることについて高く評価していただいた。特にどんな力がついたかを認識しにくい国語科において、子どもたちが身につけた力を自ら話すことに対して高く評価していただいた。第三に、付箋やホワイトボード、ワールドカフェなど、学びを深める手段を身に着けながら、このような手段を使うことを目的とせず、しっかりと教科のねらいを押さえた授業を行うことの大切さについての指摘があった。

このような指摘の後、絶対的正しさにすがりつきがちな最近の子どもたちに対して、正しさは1つではないこと、自分の正しさとは異なる他者の正しさを知ることが、多様性を認めていくことにつながるというまとめの言葉があった。教師のしてほしいこと、先読みではなく、子どもたちが自ら課題を解決する姿を大切にしたい実践を高く評価していただいた。

# 集団への適応につまずきを抱える生徒の学びを深める社会科授業

## — 自己評価活動への働きかけを通して —

能山 公介

金沢大学大学院教職実践研究科 学習デザインコース

**【概要】**本研究は、自閉症スペクトラム傾向の子どもにとっての困難である「集団への適応」に対して、授業後や単元後に行う自己評価活動に焦点を当て、そこでどのような手立てをとれば、「納得」をもって他者からの有用な視点を取り入れ「集団への適応」に至ることができるのか、そして、取り入れたことによってどのように学びが深まるのか、をテーマに研究を進めた。「集団への適応」につまずきを抱える生徒が、自己評価活動への働きかけによって集団における学びの変容を実感する経験が積み重ねられ、それを成功体験として、自分の思考を意識的に吟味する内省的思考（リフレクション）が習慣化され高まることを明らかにしたものである。

### グループ討議

〈意見交流〉

Qこれから小学校も含めて教科担任制が主流になっていくと思われる中で、教科を通して生徒の困り感を払拭していくというアプローチは非常に有効だと感じました。一人に何か手立てをしていく中で学習集団に対する波及効果や成果があったかどうかを伺います。

A「まとめ付箋」「自己評価」「小テスト相互出題」「話し活動」など全体の流れの中で、支援されている方は、自分が支援されているという感覚は多分ないと思います。実は、私自身も全体の活動の中で本人を観察はしていたが支援には入っておらず、周りの子たちに助けをもらいながらやっていた。ペアの子に恵まれた時はよかったがそうでない時は単調な活動になりました。

「まとめ付箋」や「話し活動」は全体への効果があったと思います。

Q生徒の自己評価の変容はすごくわかりました。そこで、生徒の保護者の方や他の教科における対象生徒の変容があれば聞きたいです。

A保護者については、小学校のときには苦情の電話がよくかかってきたようですが、現在は、教室のみんなと馴染んでいて嬉しいというものです。学習については、点数における飛躍的な伸びはありませんが、今後、見える化できたらいいなという

ことです。他の教科への波及については、まだよくわからないが、問題行動などはほとんどなくなっています。

Q（チャットからの質問）ペアの相手はどのように決めるのですか。授業において、他にペアワークの場面はあるのですか。

Aペアの相手については、いろんな子と関わらせるためにランダムに座席替えでたまたま前後左右になった子とペアを組ませています。ペアワークは「話し活動」「小テスト相互出題」に重点をおいてやってきましたが、通常のグループ学習においても行っています。

〈指導助言：石川県教育委員会教育振興・教員確保指導力向上推進室 大橋将課長補佐〉

①生徒Bさんが自分の考えを肯定的に変容させていく姿が見られ、とても素晴らしい取り組みでした。

②特に良かった点は、第一に「まとめ付箋」を座席順に並べていった実践で、生徒Bさんだけではなく、なかなか付箋に書けなかった生徒も授業に参加するという効果があったことです。

③二つ目として、ルーブリックや自己評価表において言葉を平易化したり横軸を取り払うことにより、自己評価の取り組みが非常にしやすくなりました。

④個別の支援計画を立て、先生方が共有し、有機的に活用していくことが大切です。

# 思考が広がり深まる授業をめざして

## — 遠隔合同授業を効果的に活用して —

林 由佳

金沢大学大学院教職実践研究科 学習デザインコース

**【概要】** 本研究は、思考が広がり深まる授業をめざして、小規模校の児童にとっての課題でもある多様な考えにふれる機会を、遠隔合同授業で実現させるために、どのような場面でどのように活用すると効果的であるのかを明らかにしようとするものである。本研究では、主として国語科の時間で遠隔合同授業を行った。実践は、3つの段階（関係づくり、授業の共有、思考を伴う場面での授業共有）に分け、段階ごとの成果と課題を洗い出し整理した。本研究を通して、「対面授業における深まり」のイメージが「遠隔授業での深まり」と異なっていること、つなぐことと切ることの使い分けによって、「個の中での深まり」が一層促進される可能性があることが明らかになった。

### グループ討議

#### 1. 実践研究の紹介

3つの段階に分けた実践研究（①第一段階：相手との関係づくり②第2段階：授業の共有③第3段階：思考を伴う場面での授業）を踏まえ、各々の段階における成果と課題が洗い出され、以下に示す3つに整理され、改善策が紹介された。

##### ①授業における基盤づくりに関するもの

課題1 児童の緊張感の払拭

課題3 話し方・聞き方

課題7 お互いにとっての有効性

##### ②指導者に関するもの

課題4 指導案とその共有

課題5 T1・T2の役割

課題6 遠隔合同と対面の使い分け

##### ③環境に関するもの

課題2 板書の共有 重要性

その上で、「思考が深まる姿」を「他者によって自分の考えが揺さぶられ、自分なりに納得解を見出そうとする姿」と定義づけ、遠隔合同授業をとおして個の中における深まり（内省的な姿）が見られたことから、遠隔合同授業が思考を深めることに有効であると報告された。

#### 2. 意見交流

実践研究の紹介に続いて参加者からは、以下の観点から質問・意見が出された。

- ・ねらいに応じた遠隔合同授業の在り方
- ・小学校低学年段階からの交流の在り方
- ・遠隔合同授業の際のT1・T2の役割
- ・遠隔合同授業における柔軟性のある授業指導案の在り方
- ・合同遠隔授業を推進していく上での、小規模学校現場と行政や大学との連携の在り方

#### 3. 評価と助言

以上の実践報告と協議を踏まえ、羽土麻弥氏（石川県教育委員会学校指導課 指導主事）より以下の評価、助言等を頂いた。

- ・GIGA スクール構想の実現との関連から今日的な教育課題に関わる実践研究である。ICT活用は目的ではなく手段であることを前提に、ICT活用のメリットを生かした実践を進めてほしい。
- ・今回の実践において、思考が広がり学びを深める授業づくりが進められたことは意義深い。今後も、小規模校の子どもたちの「他者を意識した学び」や「自立した学び」を構築するために、ICT活用が必要不可欠なものとして実践研究が進むことを期待したい。
- ・そのねらいに応じた機器選定や活用工夫など学習の場を整えていく必要がある。今回の実践研究の成果と課題について、校内だけではなく地域にある他校とも共有してほしい。

# 有用性を実感させる理科の授業設計

松田 剛

金沢大学大学院教職実践研究科 学習デザインコース

**【概要】** 理科学習が日常生活に役立つとしている日本の生徒は、国際平均と比べて低いという調査結果がある。この原因の1つに、生徒が理科学習を日常生活や社会と関連付けて活用する場面が少なく、有用性を実感できていないことが挙げられる。本研究では、生徒が理科の学習内容の有用性を実感できる授業設計とその指導法を明らかにすることを目的とし、中学校第1学年145人を対象に授業実践を行った。振り返りや生徒質問紙を分析した結果、単元を貫く「防災」という有用性のある課題を探究的に学習していくことで、生徒は有用性を実感できるということが分かった。また、その手立てとして本研究で示した探究マップを用いることに一定の効果があることが示唆された。防災以外の分野での授業実践が今後の研究課題として挙げられた。

## グループ討議

〈意見交流〉

Q 探究マップを書かせているときの生徒の反応はどのようなものなのでしょうか。

A 最初、生徒はどう書けばいいのかとまどっていたが、楽しんで書けるようになりました。学習前後の探究マップを上下に並べることで、これだけ書けるようになったのだという純粋な喜びや、学習の有用性を見出していたようです。一方、ずっとやってきたのでマンネリ化ということも考えられます。

Q 他の単元において、単元を貫く課題をどのように設定したのか教えて下さい。

A 地震の単元が、初めての探究マップでした。次の単元から、どこに中心課題を置くかを考えてやってきました。うまくいった例としては、水溶液で溶質が溶媒に溶けるという分野において、飽和食塩水にエタノールをたらすと雪のように降ってくるという実験を知って、それを生徒と一緒に探究していくことにしました。その実験での様々な疑問をもとに単元を組んでいきました。

Q 有用性の生徒質問紙調査では、「地震の勉強は大切だ」「地震分野で学習したことは、将来、役に立つ」は、ほぼ100%当てはまるとなった一方、「地震の勉強で新たな疑問が生まれた」「地震の勉強をもっとやってみたくなった」が他に比べて低いのはとても気になります。探究はスパイラル的なもの

であり、自分が理科を研究や仕事にかえていくというような刺激にするための次の一手をどのように考えていますか。

A 最後の探究マップを書いた後、もう少し時数を3時間くらい取って、自由課題研究発表会のようなものを行いたいと考えています。今年度はコロナ禍の影響もあってできませんでした。

〈指導助言：石川県教育委員会学校指導課

掘順一郎指導主事〉

① 単元を貫く課題については、今回、防災という課題で柱を作り、取り組まれました。子どもたちにとって1時間1時間の授業が何をしているのか、何のためにしているのかが明確になっていました。先生の指導においても、この単元の中で何を学ばせたいのか、どんな力をつけさせたいのかということを生徒自身もブレずに明確に指導していくという点でも、指導改善を含めて非常に有効なものだと思います。

② 探究マップについては、学びの視覚化により、自分の学習に見通しが持てたり、学習の前後における自分自身の変容に気付くことができるなど効果的であると思います。

③ 実際に地震が起きた場合の避難行動に結びつきにくいという課題がありましたが、この点に関しては、正しい行動というものがないままではなかったかと思っています。その点についての共通理解が授業の中で必要なのだと考えます。

# 高等学校数学科における協働学習を用いた授業デザイン

## — 生徒の数学に対する態度と学びの生産性を視点として —

小澤 大地

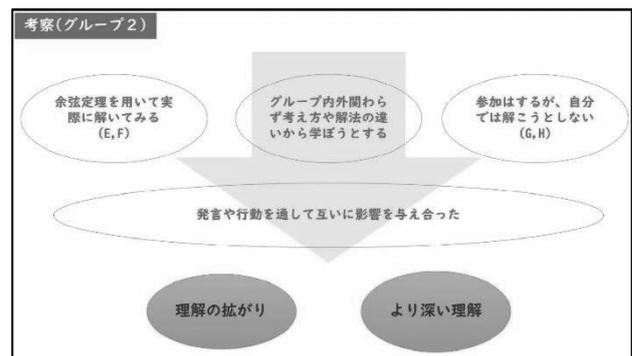
金沢大学大学院教職実践研究科 学習デザインコース

**【概要】**本研究では、高等学校数学科の授業における協働的問題解決活動を、生徒の数学に対する態度と学びの生産性を視点として分析することを通して、有望な協働学習の学習環境をデザインする際の条件を明らかにすることを目的とする。その方法として、異なる態度をもつ生徒からなるグループが、多様な解法をめぐって最善な解法を探索する協働学習を用いた授業をデザインし、実験授業を通して得られた協働活動の質的データを分析する。その結果、以下の条件が重要であることが示唆された。(i)協働学習の意義を生徒が理解し納得した上で問題解決活動を実施すること。(ii)多様な考え方や解法を認め、そこから学ぼうとしたり、探究的に取り組もうとしたりする生徒の態度を活かすことのできる課題を設定すること。(iii)生徒同士の間から新たな課題が構成され、それが共有される機会を設けること。これら(i),(ii),(iii)の結果を踏まえ、有望な協働学習の学習環境をデザインするには、教師が「協働学習の意義表明」、「多様な接近や探究が可能な課題設定」、「課題を再構成する機会の設置」に配慮することを提案する。

### グループ討議

<意見交流>

- 高校での協働学習での、苦心点はあったか。
  - ・一人で学ぶことも数学では必要であることも踏まえ、協働学習のよさに気づかせる仕掛けをした。上手くない解法を示しながら、そこからも学びがあることを共有した。
- グループ学習での一人一人の観察がよくされている。生徒たちが協働学習の良さを述べていることは成果である。
- 数学に自信を失ってしまっている生徒に対してどういうアプローチをしたのか。
  - ・少しずつ安心感をもたせるように働きかけた。正解ではないが、考えたことを評価する教室文化をつくらうとした。
- 授業にどれくらい時間をかけたのか。
  - ・2コマで1セットとして単元を計画した。ワークシートをもとに、個人で考える15分の後、協働学習の意義表明、数学に対する態度の明示を5分程度行った。その後、グループでベストな解法を決定するまでが1コマ。別日にホワイトボードの解放とその選考過程を記述、発表と質疑応答で35分、再度個人に返し自分の最終解放を決定する、という流れである。時間はかかったが、手ごたえはあった。



○生徒たちは、他のグループのベスト解法を聞いてどうだったのか。

- ・同じ解法でも、何故ベストなのかの理由に互いに納得していたようだ。自分にとっての価値をもってベストを決めたことが見られた。

<指導助言：石川県教育委員会 学校指導課

川崎創司郎 指導主事>

- ・協働学習の意義の表明、多様な考えの受容、生徒に対する細かな観察が成果につながった。
- ・この授業では多様な考えを導く問いが重要であり、生徒に応じたファシリテーション力が問われる。
- ・課題を再構成する機会の設定は意味がある。個人に返すことによって理解を深めることになる。
- ・このような活動は、全ての授業でするには時間的に難しいが、年間計画を工夫しながら実践していきたいものである。

# 生徒の思考が深まる高校古典の授業の在り方

川端 葵

金沢大学大学院教職実践研究科 学習デザインコース

**【概要】** 高等学校第2学年国語科「古典B」「花山天皇の出家『大鏡』」の単元において、生徒の思考が深まる授業を目指し、「自己の内面に起こる変化を受け止めながら考えを形成していく姿」を引き出すことを目的とし研究実践を行った。実践では、「花山天皇の出家」の描かれ方の違いに迫る授業をデザインし、目の前の生徒の実態を把握し、指導の工夫・評価の工夫・単元構成の工夫を凝らしながら、生徒たちの見方や考え方の変化を検証した。その結果、多角的な視点を関連付けて「花山天皇の出家」を捉え直す姿を引き出すことができ、作品によって自身の見方や考え方が変わること、読みを深めていく姿が見えてきた。他者と相互に関わる場を確保することや、生徒たちに提示する情報の質と量を吟味すること、そして「学びに向かう力・人間性等」を反映した育むべき資質能力に見合った評価方法を精査する必要がある。

## グループ討議

### 1. 実践研究の紹介

思考が深まる姿を「自己の内面におこる変化を受け止めながら考えを形成していく姿」と定義づけ、改訂学習指導要領でも例示されている「読み比べ」（教科書教材、「大鏡」、「栄華物語」）を通して生徒の思考が深まる姿を追い求めた。

第1次サイクル（少人数Aクラス）4時間の実践をふまえた上で、課題等を整理して第2次サイクル（少人数Bクラス）4時間を実践した。

主な指導の工夫として、ア：他教科の知識の活用、イ：教科書以外の教材の活用、ウ：「比較違いプリント」の活用、エ：ふり返しシートの活用などを行い、これら手立てに効果があったかどうかという視点から、学習評価の工夫として、オ：「レポート課題に対する学習評価の共有」をした。また、事前事後に記述方式でのアンケート調査を行い、生徒が古典の授業に求めているものを明らかにした上で指導計画を立案した。また、事後調査①では学びの成長、事後調査②では読みの変化を分析した。

本実践の考察として、「読み比べ」をすることで、生徒の作者や登場人物に対する見方・考え方に変化が生まれた。ただし、生徒に提示する「情報の質や量」を精査する必要がある、生徒相互が関わり合う場の工夫などが、より深く思考する際には必要不可欠であると報告があった。

### 2. 意見交流

上記1の報告を受け、参加者からは

- ・古典作品を指導する際の留意点
  - ・高校生の「読みの力」について感じたこと
  - ・古典における基礎基本的な力が不足している生徒への対応
  - ・高校生が「自分事」として古典の学びに参加するための方略
- などについて質問や意見があった。

### 3. 評価と助言

以上の実践報告と協議を踏まえ、大鍛冶留美氏（石川県教育委員会学校指導課 指導主事）より以下の評価、助言等を頂いた。

- ・作品を読む面白さを伝えることは、高校古典指導における今日的課題とも言える。今回の実践研究は「読み比べ」という言語活動を通して、生徒の多面的な読みを生かし、作品と向き合うことに取り組んだものと言える。
- ・第1次サイクルから第2次サイクルへ至る指導計画、指導内容の改善は本実践研究の眼目ともいえる。生徒の主体的な学びをどのように構築するかという工夫があるからである。
- ・「自分事」として読むために、事前の準備を含めた教材研究や授業づくりについて、授業者自身が熱量をもった取組を進めてほしい。

# 事象を数理的に捉えることのできる生徒の育成を目指して — 中学校数学科における「方法知」の視点を取り入れた授業実践 —

中村 光佑

金沢大学大学院教職実践研究科 学習デザインコース

**【概要】** 中学校数学科において、日常生活や社会の事象を数理的に捉えることのできる生徒の育成は、解決すべき課題の一つである。本研究は、この課題に取り組むため、「方法知」の視点を取り入れた授業デザインの立案及び実践を行い、その有効性を確かめることを目的とした。まず題材として、中学校1年の一次方程式の利用を取り上げ、方程式の立式に関する「方法知」の視点に対して、「数学的概念の認識における二面性」を理論的枠組みに位置付けた。それを基に、文字式を操作的側面だけでなく構造的側面でも捉えることができるよう授業をデザインし、実験授業を実施した。そして、実施した授業における教師と生徒の発話、生徒のノート記述やたしかめシートの記述から、「方法知」や「二面性」に関して、それらを意識させるための教師の働きかけ、生徒の発話や記述の中での認識の変化を分析した。その結果、文字式が表す数量を強調することによって、多くの生徒が文字式を構造的側面でも捉えることができるようになり、「方法知」を視点とした方程式の立式が可能となった。これらのことから、事象を数理的に捉えるためには、「二面性」に基づく「方法知」の視点を取り入れた指導が重要であることが示唆された。

## グループ討議

<意見交流>

概念の「二面性」について、再度説明を求められ、発表者が下図を使って説明をした。

<理論的枠組み>  
数学的概念の認識における  
二面性

- 方程式や文字式、数式を学習者が認識する際の二面性
- 操作的概念作用
- 計算規則や背景にある行瀬として捉えること
- 構造的な概念作用
- 対象として捉えること
- 小学校算数科の学習において

例えば、以下のような問題があった時

りんごとオレンジが合わせて5個ある。りんごの個数をxとすると、オレンジの個数は何個か。 答: (15-x)個

りんご (個)	オレンジ	
x	15-x	
3	15-3 (=)	12
7	15-7 (=)	8
	計算規則	個数
	①操作的な概念作用	②構造的な概念作用

「=」を「は(わ)」と発音するか「イコール」と発音するかによって、また「足す・引く」と「プラス・マイナス」という言葉の使い分けに、この二面性の意識が表れているのではないかと述べたところ、多くの意見が寄せられた。

- ・「イコール」と言うときと「は」と言うときで、それぞれ良いところはないだろうか。
- ・「足す・引く」を使うと、文字式を立てやすい。方程式にするときには1つの数量であると捉える必要があるため、両方の使い分けができればよいと思う。

・文字式の授業では $2x + 5$ は計算できない、と答えた生徒たちが、方程式の授業では $2x + 5 = 7x$ とする。できないのではなかったのか?と問い返すことによって方程式の理解を図ろうとした。

・二面性の理解が自然とできてしまう生徒と意識しないとできない生徒がいるのは、その土壌(学習過程)にどんな違いがあるのだろうか

・等号を過程と捉えることは、日本語の文法的な影響があるのではないだろうか。左辺が主語で右辺が述語というように考えられる。

<指導助言: 石川県教育委員会 学校指導課

川崎創司郎 指導主事>

・今回の研究対象の単元は、全国学力・学習状況調査においても他の分野に比べて無回答率が16.2%と高いことが課題である。

・この実践では、多様な考えを引き出し、数式が何を表しているのか、生徒の発話を拾いながら丁寧に指導していたところがよかった。

・小学生の既習とつないで統合していくことで、なぜ方程式を学ぶのか、その有用性を感じさせたい。

・方法知を意識すると、ゴールが明確になる。可能な単元で、生徒自身に方法知を議論させてもよいと思う。

# 音楽科における豊かな感性の育成を目指した鑑賞指導

西川 果那

金沢大学大学院教職実践研究科 学習デザインコース

**【概要】**本研究では、新学習指導要領における「音楽的な見方・考え方」の視点から、自己のイメージや感情の可視化に着目して、感性の育成につながる指導法とその有効性を明らかにすることを目的とした。先行研究をふまえ、音楽と自己のイメージや感情を関連付けるために、色彩とキーワードで曲のイメージを形成することで、感性の育成につながるように指導法を考案した。中学校第1学年71人を対象に鑑賞の授業実践を行った。考案した指導法の有効性について、ワークシートを用いて色彩とキーワード及び記述内容の分析を行った。その結果、色彩やキーワードで可視化することは、鑑賞で感じ取ったことを表現するのに有効であり、また、鑑賞した曲を比較したり、他者と交流したりすることに有効であることが分かった。一方、イメージや工夫点などの文章化する表現効果は、十分とはいえなかった。以上の結果から、色彩とキーワードを用いて自己のイメージや感情を可視化することは、「音楽的な見方・考え方」を働かせた感性の育成には有効な指導法であると考えられたが、今後、文章化する表現活動の工夫については国語科との連携などが課題としてあげられた。

## グループ討議

〈意見交流〉

Q 今回の実践を踏まえて今後、実践したいことはありますか。

A 実際は鑑賞で授業実践を行う予定ではなく、本来なら歌唱の授業で取り組んで行きたいと思っていました。コロナ禍の影響で、聴くということに力を入れていくことになり鑑賞の授業で実践を行いました。今後、どのような変化があるかわかりませんが、できることなら色彩とキーワードでイメージを視覚化する方法を用いて次につなげる実践を行っていきたいと考えております。

Q なぜ今回、鑑賞の授業で実践を試みたいと考えたのですか。

A 一番大きいのは、コロナ禍の影響ですが、実習が十分できない期間に先行研究を学ぶ中で、実技は音楽が苦手な生徒にはハードルがあり、聴くということも表現につながる重要な能力であることがわかったことも、その理由だと思います。

Q 色彩とキーワードでイメージを表現するということは、生徒にとっては取り組み易いものだったのでしょうか。

A 生徒の中には発達障害をもつ者もいました。そのような生徒は実技が好きで鑑賞をあまり積極的に

捉えていないところがありました。しかし、色彩とキーワードを用いることで表現できるようになってきました。このような実践から、様々な生徒において色彩とキーワードなら誰にでもできる表現方法ではないかと考えています。

〈指導助言：石川県教員総合研修センター

吉本仁指導主事〉

①鑑賞指導における音楽の楽しみ方が、徐々にしっかりと身についていく子どもたちの姿が研究結果から伺えました。

②来年度全面実施の中学校の学習指導要領の基本的な考え方の一つに鑑賞の指導内容の充実があります。これは同時に鑑賞の指導方法の工夫も示唆しています。ですから、今回の研究結果は、これからの鑑賞指導そして指導と評価の一体化の視点から評価のあり方を検討したり、その後の授業改造を進める上からも非常に参考になるものでした。

③「客観的な根拠を基に他者と交流し、自分なりの考えを持ったり音楽に対する価値意識を更新したり広げたりしていく過程」が大切です。また、言語活動が目的化するのではなく、自分の考え方や感じ方を深めていくことが大切であり、評価においても留意が必要です。

# 持続可能な社会の担い手の育成を目指して 生徒の内発的な課題意識を醸成する中学校の授業 — 生徒に委ねる中で『なんで?』が表出するために —

本郷 行秀

金沢大学大学院教職実践研究科 学習デザインコース

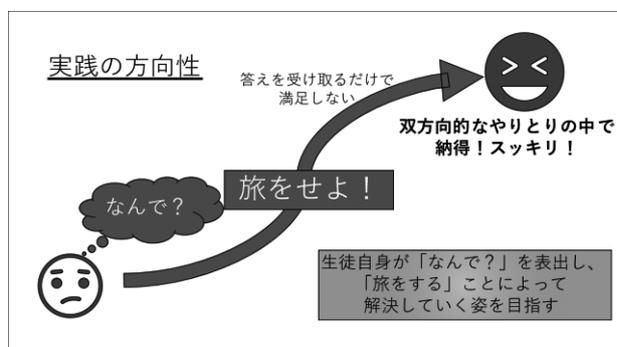
**【概要】** 中学校の授業の中で、生徒を持続可能な社会の担い手に育成したいという強い思いから、教職大学院1年次には、社会問題を数学の授業の題材として落とし込む、というように「何を学ぶか」を工夫することを考えた。2年次の本実践では、実習校で実践されていた生徒に委ねる時間を大切にする授業の中で、生徒が問題を解決する際のやりとりが「教える-教えられる」といった一方的なものから、双方向的なものに変容することを目指した。そのために「なんで？」と「旅をせよ」という2つのキーワードを設定し、「どのように学ぶか」という生徒の姿について試行錯誤を行った。その結果、やりとりが双方向的になっただけでなく、生徒自身が納得感を求めるようになったり、多様な考えに触れようと様々な生徒と繋がったりするなどの変容が見られた。実践中は「何を学ぶか」と「どのように学ぶか」という視点の違いから、1年次に思い描いたものと全く異なる目的で授業をしていると感じていた。しかし、ある生徒の意見から、解決する必要感のある問題と、協働できる場や態度が揃ってはじめて協働的な問題解決に発展するということが示唆され、本実践が当初の想いと繋がる授業実践であることを自覚できた。

従って、本実践を、持続可能な社会の担い手の育成を目指して生徒の内発的な課題意識を醸成することを目的とした中学校数学の授業実践研究として位置付けることができた。

## グループ討議

<意見交流>

- SDGsの視点で数学に取り組んだことは評価できる。効果的だったと思われる働きかけは何か。
  - ・2つある。生徒の考えを全体に提示したこと、生徒が疑問をもつことを促す働きかけを継続的にしたこと。
- 安心安全な場を作ることでできた要因は何か。
  - ・元々男女の壁が感じられない雰囲気のある学級であったが、人間関係がやや固定されているように思ったので、「旅をせよ」と促すようにした。
- 教師はちょっとだけ先を行っているが実際に進むのは生徒であり、それを支援する。そういう関係が出てきたのはどういうきっかけだったのか。
  - ・答えが定まらない課題についての生徒の異なった考えに感動していることを伝えられた時に、生徒との関係が変わってきたと思う。
- 別の学校では、別のアプローチが必要になってくると思うが、どのように考えているか。
  - ・一人で考える時間をとることと交流することの両



方のバランスを取っていきいたい。

- 数学の根幹にかかわる題材の工夫や発掘はあるか。
    - ・本単元では「みなす」ことに対する議論は、数学に関わることであると考える。
- <指導助言：石川県教育委員会 学校指導課  
川崎創司郎 指導主事>
- ・数学的活動の中に持続可能な社会への課題を取り込むことは価値がある。
  - ・「なんで」と問い返して、聞いて何が分かったかを説明すると、更なるやりとりとなる。
  - ・現実の題材を開発する苦労はあるが、手ごたえも大きい。条件を変えて数学の事象の数学化にもつながるのではないかと。

# 対話に基づく「心理的安全性」の構築を目指した学校運営 — 盲学校におけるミドル世代のマネジメント—

小山 二郎

金沢大学大学院教職実践研究科 学校マネジメントコース

**【概要】**主任業務を担うミドル世代のマネジメントの質は、学校運営や教育活動に深く関わると考えられる。本研究では主任会において、互いの話をしっかりと聴くことにより対話を深め、心理的安全性を高めることを目指し一定の効果を果たした。

しかし、全職員を巻き込んでいくような学校全体の協働体制づくりには至らなかった。本実践の結果を踏まえ、関係の質の向上、結果の質の向上等、学校運営における協働体制づくりについて考察した。

## グループ討議

＜意見交流＞

Q: 新型コロナウイルスで不安な年にぴったりの研究テーマだと思う。少ない年代の私たち主任が述べるのが、学校の安全につながると思う。主任会で話し合うときや話し合った結果を広めるときに、どのような苦労があったか。

A: 年度当初、主任の先生方との話し合いでは距離を感じたので、ざっくばらんに本音で語るように努めた。また、そうすることでお互いに助け合う様子が見られ、学校全体に波及していくことが分かってきた。ただ、「聴く」ことの大切さをもっと伝えるべきだったと思う。

Q: 私も主任として「対話」を大切にしているが、建設的な意見を出せるようにしたいと考えている。主任会で話し合うときに何かルールはあるのか。

A: 1回目の話し合いでルールを示したが、話の内容がなく、「マネジメント」という言葉で先生方は拒否反応を示した。何について話し合うのかを明確にするとともに、話し合いでは自己開示をすることで受け入れてもらうことができた。

Q: 本音で語り合うとネガティブな感情も出てくるが、なくすような声の掛け方があれば教えて欲しい。

A: ネガティブな意見が出てきたときには、まず、しっかりと「聴き」、どうしてそのように考えたのかフィードバックを行い、悩みを聞いてもらえるという安心感が生まれるようにすることで、先生方との信頼関係が強くなっていく。また、普段からよく声掛けを行っておくことが

大切だと思う。

Q: 発表内容にリアリティがあって良かった。

わたしも自己開示が大切だと思う。自己開示と「聴く」ことを大切にすることで関係の質が改善され、それが先生方の思考の質や行動の質の改善につながっていくと思う。

＜指導助言＞ 石川県立いしかわ特別支援学校

近藤 貴好 校長

- ・学校現場で「マネジメント」という言葉を使うと先生方はひいてしまうと思うが、大切なことは子どもの成長という目的を実現するためにどう協働していくかである。
- ・学校の評価計画を作成するときには、具体的な取組が見えるようにするために主任に書かせるようにしたい。
- ・信頼し任せること、人を動かす経験をさせることが大切である。先生方は、期待以上に頑張ってくれる。若手教員を育てていくためにもメンターの先生を育てていくことが大切である。
- ・実践発表された3人の先生には、教職大学院で学んだこと、すべての校種の先生方との交流で学んだことを今後活かして欲しい。

# 居心地のよい職員室づくり — 居心地プロジェクトの実践を通して —

納谷 健治

金沢大学大学院教職実践研究科 学校マネジメントコース

**【概要】** 本研究は、ダイバーシティ・マネジメントの視点から、時間的・空間的な居心地のよさを感じ、安心していられる職員室（居心地のよい職員室）になるための実践を通して、居心地プロジェクトのメンバーや教職員全体の変容を明らかにすることを目的とした。実践の結果、職員室にいる教職員全体の現状及び一人一人の教職員を意識し、それに応じた実践を模索する中で、プロジェクトメンバーは多様性を尊重しながら関係性を構築していくことの大切さを感じ始めるとともに、学校参画意識が強まった。また、同僚教員に関しても、居心地プロジェクトを肯定的に捉えられ、一定の成果を上げることができたものの、教職員全体の変容が見られるまでには至らなかった。職員室の居心地を組織的に考えることで、一人職や専門的のスタッフを含むより多くの教職員にアプローチすることができ、多様性を踏まえ多方面から企画を考えることができた。

## グループ討議

<意見交流>

- ・居心地プロジェクトの一環として行われた「先生ローテーション」などの取組に対して子どもたちからも良い評価を得ているように、先生方はいつも子どもたちから見られているということを忘れてはならないと思う。また、「居心地のよい職員室づくり」のためには、先生方にはカウンセリング能力とオープンマインドが必要だと思った。
- ・学校マネジメントの実践研究では、管理職の理解が欠かせないと思う。居心地プロジェクトを校務分掌に位置付けていただき、その取組について月に1～2回、管理職と打合せをしていたところがよいと思った。私も来年度、管理職との情報交流を定期的に行うことを大切にしていきたい。
- ・「居心地のよい職員室づくり」に向けて、先生方がお互いの違いを認め合い尊重するという「ダイバーシティ」の考え方を重視し、先生方を一人も取り残さないという姿勢で取り組んでいるところが素敵でした。居心地プロジェクトの取組として「ブロックチェーンを使った校内における仮想通貨」や「slack アプリ」についても検討したと記されていたが、どのような取組だったのか詳細をまた教えて欲しい。
- ・「大人のマネジメント」はとても難しいと思うがとても柔らかいやり方で実践されているところが素晴らしいと思った。特に「居心地のよい」のと

らえ方について、「ダイバーシティ」の考え方である多様性を尊重しているところに共感した。プロジェクトメンバーも4月から実践を積み重ねていくなかで「全部巻き込むのいいと思っていたけど、それより話せる関係、相談しやすい関係づくりに力を入れた方がいいと言われ、自分もそこが大事だ」と述べ、「チーム＝みんなで」という概念を捨てることが大切であると考察している。私自身も、先生方とつながりたいときにつながることができる学校でありたいと思うし、そんな職員室を創っていきたい。

<指導助言> 石川県立いしかわ特別支援学校

近藤 貴好 校長

- ・教職員間には協力し助け合う援助関係や同僚性が大切であるが、そのためにはカウンセリング能力が必要になってくる。
- ・先生方が元気な学校は、子どもも元気である。先生と子どもは一体であり、先生方が行動を起こすことが子どもの成長につながっていく。
- ・管理職のリーダーシップはもちろん大切であるが教職員が目標を共有し、一人一人が何ができるかを意識することが大切である。
- ・教職員は多忙化で時間のゆとりがなくなっている。実効性のある取組をするためには、時間を生み出す工夫をするとともに、教職員一人一人の持ち味を発揮していくことが大切である。

# 対話を通じた校内研修の構築

日光 博史

金沢大学大学院教職実践研究科 学校マネジメントコース

**【概要】**石川県では平成31年4月より「若手教員早期育成プログラム」が実施されている。本実践では、若手教員との対話を意識し、「若手教員の困り感に寄り添い、若手教員が自らの成長を実感できるよう、丁寧にサポートしながら学校全体で育成していく」校内研修の実施を通して、「若プロ」を実施する学校組織の課題と若手研修コーディネーターが果たすべき役割を明らかにすることをねらいとした。1学期は若手教員の思いを聞いて、学習指導や生徒指導の基本的な知識や考え方や、実践スキル等を身に付けるための研修を実施した。しかし、実施過程で、若手教員の困りや不安が解消されていないことや若手教員自身が研修を構築していくことの必要性に気付いた。そこで、2学期以降はボトムアップ型の研修に切り替えることとした。若手教員は、不安や葛藤を抱えながら自分たちで研修を進めていった。その結果、組織全体で若プロの目的を見直し、教員同士が対話を通して新しい関係性を更新ながら研修を構築していくことが重要であることが見出された。今後、「若プロ」は若手教員が主体的に研修を企画し、メンター制度やコーディネーターの積極的な介入等、日常的に全教員が若手教員と関わっていくことが大切であり、実践を積み重ねていきたい。

## グループ討議

<意見交流>

**Q1:** 2学期に入って若手教員の方に研修内容の選択をある程度任されたということですが、コーディネーターとしてどの程度任せるとかという、その匙加減について、どのような感じで関わって行ったのでしょうか。

**A:** 心掛けていたことは、日頃からこまめに声掛けをすることでした。一方、わたしが声掛けをすることで「研修をしなきゃ」と追い込んでしまうのではないかと危惧もしていました。しかし、11月の研修に関しては二人の若手教員の方から「こんな研修をしたい」という申し出があったので、受け身の姿勢からすこし変わっていったように思います。私も中に入って一緒にやる、という方法も考えられるのですが、経年者のわたしの考えを押し付けてしまうことにならないか、と考えて、結構任せっきりにしてしまった所があります。若手同士の話し合いではどうしても限界があって、行き詰まりを感じていたようで、そこが一番の反省点です。

**Q2:** 若手と経年者の研修目的のズレという点につい

て教えて頂けますか。

**A:** 若手は授業のスキル面に目が行きがちで、一方経年者が若手に伝えたいことは教師としての心構え・教育観・人間性といった面であることが、聞き取り調査から分かりました。

<指導助言> 石川県教育委員会 学校指導課 教育振興・教員確保指導力向上推進室

杉澤 寿治 室次長

若手同士が対話で繋がるということも大事なのですが、若手とベテランがどう繋がっていくのが、これからの課題だと考えています。

いつもあちこちでお話させて頂いていることですが、平成29年・30年とモデル校での実践研究を行いました。その時に一番印象に残っているのが、校長先生から伺ったつぎのような話です。1年間が終わった最後に、その若手が「『何でも聞いて。何を言っても大丈夫なんだよ』という雰囲気を作ってくれた。それが一番嬉しかったです」と言ったそうです。これが、校内で研修をしていくことの一番のポイントなんだろうな、と考えています。

# 若手教員のやりがいを生み出す働きかけ

## — ミドルリーダーと若手教員の関わり合い —

廣田 学

金沢大学大学院教職実践研究科 学校マネジメントコース

**【概要】** 近年、教員の大量退職大量採用によって世代交代がどんどん進んでいる。これにより、ベテラン教員が担っていた仕事を若手教員が担うことになり、若手教員の負担は大きくなってきている。本実践は、若手教員が研修や自らの業務遂行を通じて、教師という仕事にやりがいを見い出すことができるようになることが目的である。本実践の取組は、大きく2つのブロックに分けられる。1つ目は「若手教員早期育成プログラム」（以下「若プロ」）の場面を中心とした若手教員との関わりにおける実践である。2つ目は、若手教員2名に着目した日常的な関わりにおける実践である。その両方に対し、ミドルリーダーとして筆者自身がどのように考え、いかに関わっていったかを具体的かつ詳細に記述・分析した。それを基に若手教員と関わる際の要点、及び組織マネジメントにおけるミドルリーダーの役割をまとめた。若手教員の内部から湧き出る想いやアイデアを大切にそれを共に育んでいく姿勢が基盤であり、管理職と若手教員のコミュニケーションの場を設定することも若手教員のモチベーションを大いに高めることがわかった。

### グループ討議

<意見交流>

**Q1:** 最後のところで若手と学校長の交流が深まる場面が出て来るのですが、学校長と若手教員の関わり合いについて、普段から特に意識してコーディネートされることはあったのでしょうか。

**A:** それは特にはなかったです。うちの学校長は普段から若手によく声を掛けておられる方です。

**Q2:** 若手にやりがいを感じてもらおうということが、この実践の目的となっているのですが、やりがいと負担感のバランスという点に関して、若手の実際の負担感というものほどの程度のものだったのでしょうか。

**A:** この位の負担感だ、ということは測りかねますが、全員で分担して各中学校で説明会を行いました。最低一人1回、多い人で3回して頂きました。後でインタビューした時に、「そういうのは苦手だから行きたくない」というコメントも頂きました。でも、皆でやるので、与えられた分に関しては不満はないということだったかと思います。インタビューをして分かったことですが、わたしは負担にならないよう10分でもいいから話してくれればと思っていたのですが、長い人では1時間以上も話してくれました。どんどん、どんどん、話し出して話が止まらな

い。負担を掛けないようにという思いがマイナスに働く場合もあるのではないかと思います。

<指導助言> 石川県教育委員会 学校指導課 教育振興・教員確保指導力向上推進室

杉澤 寿治 室次長

若プロコーディネーターの方が一番苦労されるのが「時間」です。其々の都合があって、時間調整が難しい、と。しかし、皆を集めて行うのが研修だ、という考えを改める必要があると思っています。個々の経歴や特性に応じた研修を組み立てることが大事で、それは県で一斉におこなう研修では難しい。校内研修だからこそ出来る、オーダーメイドの研修をすることによって、全体的な底上げにつながるのではないかと思います。今日のお話の中で、お二人の若手との日常的な関わりということがありました。日常的なOJTをして行くときに、それが教員集団全体に拡がって行く、ということが目指すべき方向性だろうと思います。コーディネーターやミドルリーダーがそういった関係性を仕掛けて行くことで、学校全体の日常的OJTを実現する。それが、若プロをコーディネートする際の一つのあり方ではないかと思います。

# 園内研修の土壌づくり

## — 管理職としての取り組み —

林 理恵子

金沢大学大学院教職実践研究科 学校マネジメントコース

**【概要】**本研究は、園内研修の土壌づくりにおいて、管理職の役目はどのようなものがあるのかを探るものである。この研究では、2つの実践に取り組んだ。一つは、勤務環境の見直しである。保育教諭は研修をするということは、時間や労力が掛かり、仕事が増えると感じる。そのため、保育教諭が負担なく園内研修に取り組めるように管理職が行った勤務環境の見直しである。もう一つは、園内研修の実践である。この研究を通して、次の2点を確認することができた。①管理職が勤務環境を整えることによって、時間的にも心理的にも保育教諭の余裕が生まれ、園内研修に集中できる。②Guided Play (ガイドされた遊び) の考え方を園内研修に当てはめ、管理職が働きかけることによって保育教諭が主体的に学ぶ姿がみられ、園内研修が充実するとともに園内研修の中身が深まるにつれ、中堅教諭のファシリテートの学びが必要となってくることがわかった。

### グループ討議

<意見交流>

**Q1:** 大きな幼稚園で職員数も多い中で、全員での研修なのか、それとも学年毎にやっているとか、そのあたり何か工夫されていれば教えて下さい。

**A:** 朝7時半から夕方6時半まで常に子どもが居るので、なかなか全員での研修は難しいのですが、夕方4時からパートの先生に子どもを見て頂いて、あとの全員で研修をするとか、早帰りの日を作って土曜の午前中に少し時間を作って全員で研修をするとか、色々試行錯誤しながら勤務時間内で終わるように取り組んでいます。

**Q2:** 最初、何の為に研修をするのか?という疑問を職員の方が抱いていたということでしたが、こうして4年間の実践を終えられて、研修の意義とは何か、と考えていますか?

**A:** しっかり理論を学ぶことによって、その結果が子どもに還元されるということだと考えています。職員の側の声を聴くと、発言をしたり、話を聴いてもらうという機会が設けられることによって、悩んでいることが解決できたり、日々の保育が広がるという意見をもらっています。学び続けるということはやはり大事なことだということと、あと、幼稚園の

先生というのは、子どもが初めて出会う先生なのですね。その先生が皆のことを見てるよ、ということであの時期に感じるということは、とても大切なことだと思っています。

<指導助言> 石川県教育委員会 学校指導課 教育振興・教員確保指導力向上推進室

杉澤 寿治 室次長

研修を受けたことだけで人が育つ、ということはあまりない。研修を受け、その後の実践を通してお互いに学び合うことが大切で、そのことが成果に繋がっているのだと思います。

学校の管理職のうち、教頭先生は職員室の担任と呼ばれる。職員室にいる職員のことをしっかりと見る。そして、褒めるということ。そういうことが大事なことなんだ、ということをお願い浮かべながらお話を聴かせて頂きました。

トップダウンのマネジメントとボトムアップのマネジメントというのがあります。園長先生の思いを聴くという場面がありましたが、ミドルがそれを自分の言葉でどのように職員に伝えて行くか、という部分が大事なことになるのだらうと思いました。

---

金沢大学教職大学院オンラインフォーラム報告書（2020年度）

2021年9月30日 印刷発行

発行所 金沢大学大学院教職実践研究科

---